

ポン(山田塊也さん) 追悼特集

前号5月号を印刷屋さんに入稿した翌日の4月26日、連載執筆中のポンが風邪をこじらせて逝ってしまった。享年73才。もともと体が弱くこの何年かは出かける時に酸素ポンベを持ち歩いていたとはいえ、いつも元気いっぱいだったポンが、まさかこんなにあっけなく亡くなるとは誰も(本人も)思っていなかっただろう。連載の“ヒッピームーヴメント史 in ヤポネシア”の相当部分はポンが中心の一人だった“部族”の活動について書いたものだったが、山尾三省、サカキナオに続いてポンがいなくなったことで、1つの時代が過ぎ去ったという感がある。今号はポンに関わりがあった人たちに各々の立場からのメッセージを寄せてもらい、ポンへの追悼としたい。(あ)



ポンの野性とは

ゲーリー・スナイダー

ポンこと山田塊也は、「部族」のエネルギーと炎が燃えていた時代において、もっとも独創的ではっきり物を言うメンバーのひとりであった。彼の絵画作品と不屈の精神が、当時のさまざまな出版物やイベントを生みだしていった。私の手元には、ポンとの話を書き留めた長いノートが残っている。暖かい雨が降りそそぐ奄美大島の夏の午後、わたしはポンの話しに聞き入っていた。いつかそれを文章にしたいと思っている。

ポンとななおが疎遠になる時期があった。おそらくそれは、社会変革をめざす組織的な活動について、ふたりの哲学が食い違っていたからだろう。ななおは、ポンが出版した本があまりに率直すぎるという理由で満足していなかったようだ。ななおは抑制と純粋さを旨としていたが、ポンはすべてにおいてオープンで、秘密は持たず、何ごととも隠さない生き方を好んだ。すくなくとも、私にはそう見えた。

私は、ななおとポンのどちらも尊敬していた。ある年、部族の仲間と一緒に旅をしたことがあった。たとえ、ななおとポンが口を利かなくとも、私はふたりと同じように付き合っていた。松本にある臨濟宗の寺にいたとき、ポンと長話を楽しんだことはいまでも憶えている。

最後にポンに会ったのは、2007年8月の暑い夏の日の夜、渋谷にある山路和広氏の「フライング・ブックス」のビルの屋上に昔の部族のメンバーが集まったときだ。私たちはうだるような熱帯夜に、トビウオを焼きながら、冷えたビールを飲んだ。カイ・スナイダー[詩人の長男]も顔をだした。風変わりな無邪気でイカした連中が都会の真ん中にいるのを見て、カイはびっくりしていた。ポンは肺気腫を患っていて、キャストのついた小さな酸素ポンベを引っばっていたが、元気いっぱい、いつもの茶目っ気ぶりは健在だった。なんとというすごい人間なのだろう。そして彼が歩んだ道もしかり。

ななおは晩年、仲間や友人たちから、なかば冗談で、もちろん賞賛もこめて、「ななお国立公

園」と言われていた。つまり特別に護られなくてはならない存在という意味だ。

ポンは違っていた。彼が体現していたのは別の野性だ。国立公園のように正式に認知されたこともないし、これといった観光客を引寄せられるわけでもない。しかし、私たちはみなそれを知っていた。ポンの野性とは、名もない場所に力強く生き抜く自然である。それは倉庫や工場の隣の空き地、そして川沿いに広がる、自生の空間のようなものだ。そこには、廃止された鉄道の線路や忘れ去られた釣り桟橋、あるいは波止場があり、その傍らには大きな送電線の鉄塔が整然と並んでいる。そのむこうには、かつての開発や火事の傷跡から回復しつつある草地、崩れかけた古い駐車場、そしてなかば汚染された海の入江のはずれには、本物の濁り河口域が広がっている。これは都会の自然だ。この場所には、そこを住処とするタカの番、ポプキャット、あるいはアナグマの番、すばしこいネズミやジリスの群れがいる。そこには数頭のキツネやコヨーテもやってくる。川にはカワウソも生息している。自らを再生する、忘れ去られた自然。それは境目の真の生き方であり、これがポンだ。私は長い間、ポンのことをこんな風に考えてきた。彼は笑い、冗談を言い、自分のやり方を批判しながら、絵画に、音楽に、物語に、そしてあの独特の嘲笑的な喜びの笑い声に、野性の精神をなんども蘇らせてきた。

(田村 ベナヴェンテ 幸子 訳)

ぼんちゃんのいた風景

さあき

死が美しいとは思わないけど、ぼんちゃんの寝顔はほんとうに綺麗だった。死に際、死に様、死に顔にはそのひとの人生があらわれる。示される。そう思う。娘と孫に見守られて、看取られて、フーテンとよばれたぼんちゃんの最期は、これ以上ないあったかい家族と共にあった。骨まで勇ましくて、どうだ！と言わんばかりだった。

声をあげて、泣いた。
声を殺して、泣いた。

みんな 己の中のぼんちゃんを思い出しながら、目の前の彼を焼き付けていた。現実をうけいれなくちゃ。言い聞かせながら。

死を肯定も否定もしないけど、素直に心の底から、さみしい と、想う。ぼんちゃんを想う。あの笑顔にまた会いたい と。逝ってほしくはなかった と。目を閉じれば会えるんだけど、存在を感じることができただけ、きつとまた、出会えるんだろうけど。今生から目の前から いなくなってしまったと痛感する。

まだまだ時間がかかるんだろうなあ。

ぼんちゃんとあきさんが、じゃれあうみたく話す姿が好きだった。娘ふたりを眩しそうにやさしく見つめるぼんちゃんが好きだった。みんなの中、ちいさくて大きいぼんちゃんの存在が好きだった。さあき最近どうしてる と声をかけてくれるあの笑顔が、大好きだった。ぼんちゃん、たくさん風景をありがとう。

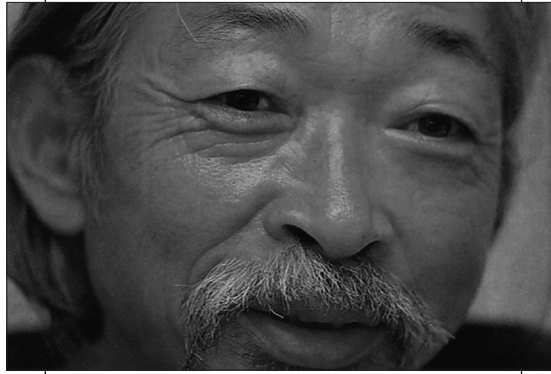
仙人みたいな 三省が逝って、魔法使いみたいな ナナオが逝って、妖怪みたいな ぼんちゃんが逝って、...

まだまだ人間くさいわたしはこれからも 汗にまみれて、泥にまみれてもがきながら、あがきながらただよいながら、さまよいながら・・・尽きるその日まで。自分の旅をつづけてゆこう。

そこからみていてくださいな。

人間業師ポン

澤村 浩行 (サワ)



ここのホビ族は死者を追悼しない。死界はこの世の真裏に貼り付いてるので見ることは出来ない。つまり死は同じ世界の反対側にクルッと転換するだけの事だから。

1970年、気楽な冬から激しい夏に移行中の南インド西岸ゴア。真っ青なアラビア海沖まで遠浅のコルバビーチ。内陸側にピッシリ立ち並ぶ椰子林。そのヒトデ型の葉影絡み合う屋下がりに、知恵袋を担いだココペリみたいなボンと初めて会った。彼は、50年に逝った聖者ラマナ・マハリシの故地を巡礼したところだった。海辺の椰子の葉ムシロ小屋にデリケートな日本女性と住み、目下 人生最大の問題は女だよ、とため息をついた。

僕より5歳上の戦前生まれ。60年安保世代 戦争に負けるとはどうゆう事なのか？を検証し合う世代だった。

60年代後半の表には世界的な学生反乱、ベトナム反戦、人権と環境運動、裏にはドラッグ、セックス、ロックにヒッチハイクのアナーキズムが噴出してた。僕もボンもその表と裏をまぜこぜにしたが 彼にはコミュニティー指向が強く、付き合いは抜群。その相手も千差万別だった。

以来40年間、特に彼が酸素吸入機を使うようになってからは良く会った。2010年3月末、例の出国ご挨拶に埼玉県北の小駅下車。稲株広がる田園地帯の土の道、彼方の森と平屋を目指して歩いた。オー、の声。江戸時代の儒者みたいなボン。年寄りしか出せない絶妙な味わいの煮物に焼酎。彼が少女時代の娘二人とインドを旅した時の話。長旅の後、インドどうだった？と聞いたら、アー、生きる事は大変だ！と娘達は答えた。彼女達の家族がボンの晩年を支えた。夕食後に一息ついたら、語り部として伝えるべきは書いて発表した。もう書けないよ、と静かに言った。翌朝の正統派日本食の後には、大麻はいずれ合法化されるだろう、だが ハイな状態を、いかにして人間性の向上や、社会の問題に目を向けた行動に結びつけるかが、常に問われるだろう、と言いついた。

5月ニューヨークで、国連NPT会議に向けた平和行進中の加藤上人、部族コミュニオン時代ボンの相棒だったマモに彼の死を告げた。6月アリゾナ、彼が奄美石油基地反対団結小屋に赤軍過激派を泊めた件で拘留され出所してから一緒に旅した人、先住民居留区では、2000年彼のルーツ高山位山からこのピックマウンテンへと強制移住反対平和行進を彼と共にしたナバホ族にも会った。真裏の世界の人間業師ボンに合掌する。

PONはシヴァ派のサドウだったよね!!

フーゲツのJUN

ボクにはこんな印象。歌舞伎町の侏儒の似顔絵描きが、ある日からフリークスのシヴァ派の

サドウになっちゃった、という。

ボクにも、インドへ行かなければという強迫観念を植え付けたのはPONたち「部族」(ボクが知り合った頃は「ハリジャン」つづいて「バム・アカデミー」と名乗っていた)の連中だ。

ボクは17か、18でナナオにもさんざん言われたよ!

「17歳で死んじまいな!」

くそ! 旅に出てやる(笑)!

そうでなきゃ、ただの新宿フーテンで終わってたでしょう!

睡眠薬とシンナーなどというくだらないケミカル薬剤で健康を壊すか、友人だったマリア(阿部薫)のように飲み過ぎで死んでいたでしょう!

「新宿・風月堂」で出会ったナナオ、三省、ナーガ、シロ、マモ、ジャンなどなどの「部族」の連中に感謝してます!

とりわけ、当時仲が良かったのがPONだった!

ボクもマンガ家志望だったからね(笑)。

そして、「まつり」で再会するのだ。高山のPONのところにも行った。嗚呼、思い出は尽きないよ。

PONよ。安らかに!

シヴァのマントラが尽きることなく耳の奥で響いているよ!

PON! お前の声で!

♪シャンカラ〜シバア〜♪

♪シャンカラ〜シバア〜♪

♪シャンポーマハデバ♪

♪シャンカラシバア〜♪

(永遠に繰り返す!)

★電腦風月堂 www1.ocn.ne.jp/~ungura/

同志であり、導師のボンへ捧ぐ

ピースランド・中神隆夫

「5月8日のことだけど、車の手配ができなから、今回は見送るよ」

「こちら(高山)から迎えに行こうと思ってるんだけど」

「お、そうか。じゃあ行くことにするか、それまでに風邪も治るだろう。月曜日が診察日から、医者に相談してみるよ。楽しみにしてるよ」

「迎えに行く時、また連絡するね」……

これが、ボンさんと電話で交わした最後の会話となった。

それからわずか6日後、ボンさんは帰らぬ人となった。最後はモルヒネの注射を打ったという。入院前の日記には「地獄の夜」と記してあった。よほど苦しかったのだろう。ぼくたちにはあまりにもあっけない死だった。

4月26日、今から24年前、ソ連のチェルノブイリ原発で事故があったその日が、ボンさんの命日となった。ボンさんたちが仕掛けた「'88いのちの祭」が、チェルノブイリ原発事故をきっかけとして盛り上がった反原発運動の流れのなかで、「NO NUKES ONE LOVE」を合言葉に開かれたことや、'87年ボンさんの飛騨高山帰郷報告会の手みやげが「ホビの予言」上映だったことを思えば、ボンさんが旅立ちをこの日に選んだのも納得がいく。

ぼくがはじめてボンさんに会ったのは、その帰郷報告会の日だった。ボンさんのことはその日まで全く知らなかった。

部族やナナオサカキ、山尾三省の名は知っていたが、山田塊也という名はきいたことがなかった。集会のあと、あいさつを交わし、少し話した。「ポップ・マーレーが好きだ」と言ったら「高山でそんなやつに会えるとは思ってもみなかった」と喜んでた。そこからボンさんとのつきあいが始まった。

羽生での密葬のあと、帰り際に娘の宇摩ちゃんから「位山に散骨してね。ボンちゃんが喜ぶだろうから」と分骨した遺骨を預かった。ピースランドのカウンター越しに祭壇を飾るために、ボンさんの遺影を探そうと古い写真を引っ張り出していたら、一枚一枚の写真の間から、ボンさんと時間と空間を共有していた頃の情景がぼろぼろとこぼれ落ちてきた。色んなことを一緒にやった。

'90年清見村「みどりといのちの祭り」。'91年舟山で「山の幸コンサート」。'94年「山田塊也インド随想彩画展」。'96年朝日村冬季国体反対ステッカー事件。高山での「シナドフェスティバル」……

何事にも真正面から向き合い、直球で勝負する人だった。だからドジもずい分踏んだ。格好悪いことも含めて、ぼくたちの前に全てをさらけ出して、ヒッピーフリークスとしての生き方を示してくれた。

ヒッピーとは生き方のことだ。いかなる権力にもまつろわず、他を排除せず、非暴力で管理されることを拒み、地球の声に耳を傾ける。

ぼくが高山へ来たのはボンさんと出会うためだったと、確信をもって言える。久しぶりに会って話したいこと、話してもらいたいことがいっぱいあった。5月8日、9日の「ふんにやら」は、ボンさんを知らない若い人たちに、彼の話を聴いてほしくて企画したというのが本音だ。ボンさんは先に逝ってしまったが、ボンのスピリットはぼくたちの中で生き続ける。ボンさんが旅立った4月26日をぼくたちの新たなはじまりの日にしようと思う。

■ピースランド <http://peaceland.gozaru.jp/>

追悼 山田塊也

桂川 直文

ボンこと山田塊也氏と知りあったのは、彼が奄美地方から故郷高山へ帰ってきた頃の、1986年から87年にかけてだったと憶えている。「88いのちの祭り」の成功を受けて、当時はボンといえども何か尊大な感じがして近よりたいものがあつた。だがその後、インド帰りに税関でバクられて敗北宣言なるものを出してから「確かにボンは変わった」という印象だった。以来、様々な面で師事、兄事させていただいた。

天下の自由人でヒッピーであるボンが、市井の一商工人である私に親密に接してくれたのは、中部山岳地帯をはさんで東西に暮らす山岳民族としての同郷のよしみのようなものがあつたのではないだろうか。というのは明治5年の廃藩置県の折、高山を中心とする岐阜県飛騨地方は、私が暮らす安曇野がある長野県中南部と併合され、松本を県庁所在地として筑摩（つかま）県を形成したのである。名前から判るように、この地域は古来より麻が沢山栽培されていたことを示している。とても良い県名なのだが、明治9年、松本県庁焼失と共に筑摩県は消滅した。

安曇野から高山へ行くには安房峠を越えなければならない。そこは日本アルプスを越える難所であり、初めてボンの所へ行った頃はまだ安房トンネルは無く、相当な覚悟が必要だった。それでもボンと遊ぶのは楽しく、一時は毎月のように安房峠を越えたものだ。

ボンの同郷の友人である漫画家の真崎守による「安房一族の研究」なる世に出ていない奇書がある。これはボンに貰ったものである。そこには、安房峠は「あぼう」と読むが、千葉忌部が開いた安房の国と同じ字であり、その元は阿波であり、麻から転じたものであること、大麻を奉ずる忌部氏の氏族によって安房峠は命名され、この地域が開かれた等の下りがある。ボンと私は地域の大麻の神々によって結ばれていたと実感している。

ボンの最後のインド旅行の帰途、我が家に立ち寄り、その足で連れと3人で高山へ行ったことがある。その時は安房峠ではなく野妻峠を越えた。乗鞍岳を背に、つづら折れの坂道に石垣で囲まれた民家が続く野妻集落を目にした時は一同感激した。ボンがインド帰りのことであつて「ネパールとはこんなところではないか」と思ったものだ。

以前から私は生まれ育った長野県池田町の古い町並み保存運動を地元で展開していた。それは蔵の修復・保存を主体とするものだったが、ボンのところへ行き、高山や飛騨地方の町並みを見て、町屋や古民家の美しさを認識したのである。ボンの足跡は多方面に亘るが、私には高山時代が最も思い出深かった。

1993年に私がバクられて大麻自由化運動を始めた時は、ボンはいち早く賛同し、生涯をかけて強力に支援してくれた。というより、常にボンが展望を開き、道を示してきたといえる。ボ



ンは私にとって偉大な先達であり、信頼する同志であり、運動の精神的な柱であつた。日本の大麻自由化運動はボンが先導してきたといえるだろう。

トリックスター・ボン

シャコ

四月二六日、山田塊也が死んじゃつた。画家であり、詩人であり、作家であり、社会運動家でもあつた。して、その正体は、お祭りボン太！時々遊びに行くと、酸素チューブを鼻に差し込んだ姿で、相変わらずのアジテーター然としていたボン。元気、元気の元気印、いや、ヒッピー印。六〇年代からヒッピー・ムーヴメントを牽引して来た一人でもあつた男は、埼玉の片田舎に引っ込んでからも、外見も中身も変わることがなかった。そう、すぐ死ぬようには見えなかった。

七〇年代、琉球弧・奄美大島の無我利道場を拠点としてヤマハ、CTS=石油備蓄基地計画などのヤマト資本、国家権力と痛快、融通無碍に闘つた。八〇年代は活動の場をヤマトに移し、一九八八年八ヶ岳での「生命の祭り」にも力を注ぎ、今で言うエコロジー運動を下から支えていた一人でもあつた。骨の髄からのヒッピーだから、生き方は変わらない。そういう自信が、黙秘しない在り方となつたのかもしれない。その黙秘しない在り方が多くの批判を招いた。その意味で、救援連絡センターの思想的根拠とは違う生き方の人だつた。しかし、琉球弧に於いて、ヒッピーとしての思想的根拠に立って国家との闘いに向けての布陣、その闘い方は、それまでの左翼、社会運動にはない新鮮なものであつた。ボンという存在があつてこそ、琉球弧の一隅の奄美に於ける闘いが様々な人たちの出会い・交流を活性化させ、運動のダイナミズムが生み出されていったと言ってもいい。その意味で、ボンはなくてはならない存在であり、彼の代わりになりえる者は居なかつたのだ。ボンはトリックスターでもあつた。黙秘しなかつた、弾圧を招いた、と批判されてもなお、やっぱり

エライやっちゃ！なのだ。私もまた、運動のダイナミズムは、硬直と教条とによって生み出されることはないことを、ボンの闘いと人生から学ばせてもらった。

葬式では、沢山の気持ちが流れながれ満ちていき、ボンを優しく包んだ。ホラ貝を吹くことも、もうない。溢れ流れゆく言葉も、もう聞かれない。煙と化して大空に大地に散り広がって、煙の立つところで踊り続けるだろう。合掌！

(救援連絡センターの会報『救援』より転載)

★救援連絡センター <http://qc.sanpal.co.jp/>

「奄美で一緒に暮らそう」

ミオ

「奄美で一緒に暮らそう、シマの人達に受け入れられるように結婚しよう。石油基地計画に反対して戦っている地元の人達と一緒に戦おう。イカダを作って石油基地計画地の無人島に渡って住もう」とボンにプロポーズされたのは23のとき。離婚して2歳の娘と母子家庭を営んでいた私はそんなものかな、と思い「私は生々しい人間関係の中にいたいから集落に住んで、ボンとはイカダで行ったり来たりすればいいや」と、懲りたはずの結婚に踏み切つた。一という話しを娘にしたら、一言「バカカップルだね」

ま、とにかくシマに受け入れられるもへったくれも無い生活ぶり、始めの頃のしおらしい気持ちはどこへやら、4年後別れる前に私とボンは結婚という形式をやめた。

シマの人達から愛され嫌われ驚かれあきれられたわたしたち一

初めてシマに行った日、静かな夜の間に響くふくろうのポホッポホッという鳴き声と、ボンが用意して待っていてくれた、超オンボロな物置小屋をちょっぴり改造した新居？に私は満足し、幸せだった。

二人の娘が生まれ二人ともボンがとり上げた一共同生活の看板を上げていたにもかかわらず、ボンは自分の娘たちを格別に可愛がっていた。今やそれぞれ二人の子持ちになった娘達はボンちゃんに似て、話しは50倍くらい大袈裟だし、騒がしいし、泣いてるかと思うと、笑い転げている。

ボンが私にくれたもの、娘達と、骨身にしみこむようなあのシマの夜の静けさ。

喧嘩もいっぱいしたし一私がかつたと怒り、ボンがグチグチとんでもなくひねくれたことを言い、とうとう私が吹き出して笑い転げて終わったこともあつたな。

カッコツケマンのボン、調子いいボン、でも娘達の悲しむ姿を見ていると、素直に言いたくなる。

深い深い悲しみをありがとう、って。

じゃあまたね、ボン。

娘孝行の父親だね。

維 摩

私にとってはただの父親で特別ポンちゃんの持っている何かに惹かれたことはなかった……。

でも亡くなってからの数日間で沢山のことを想い、感じ、気付かされた。

ポンちゃんに憧れるとか、惹かれるとかじゃなくて、当たり前のようにポンちゃんに影響されまくった私がいる。

奄美時代は、私の記憶ではすでに外へ出たポンちゃん、時々絵本を送ってくれて、時々祭りに連れていってくれて、時々帰って来て沢山の話をしてくれる。

机に向かっていてポンちゃん、後ろからこぶをみていたら急に振り向いて気持ちのいい煙を顔にかけてくれる「もっともっと！」って言ったのを覚えている。

少ない想い出だけど、大好きな想いでばかり。

インドにポンちゃんと5ヵ月間旅したことは、私にとっても宇摩ちゃんにとっても一生もの、ポンちゃんがインド好きでよかった。

インドにも奄美にも高山にも長野にも散骨するよ、また一緒に旅しようね。

ポンちゃんの死を何度も覚悟しているつもりだったのに、全然出来ていなかった。

必ず「奇跡です」って復活してくれるポンちゃん、今回もそう思っていたよ……。

ポンちゃんがこの世にいないってことがなかなか実感できない。

私はもっともっとポンちゃんと一緒にいたかった。

悔いが残っちゃったよ。

でもポンちゃんは常に当たり前のように今出来ることを全て発揮して生きていた、そう考えるとポンちゃんは悔いのない人生だったんじゃないかなー。

娘の為でも親の為にでもなく生きたポンちゃんは何よりも娘孝行の父親だね。

娘の為に頑張った人生なんて言われたら残された娘はたまったもんじゃない。

ポンちゃんそこは手本にするよ！

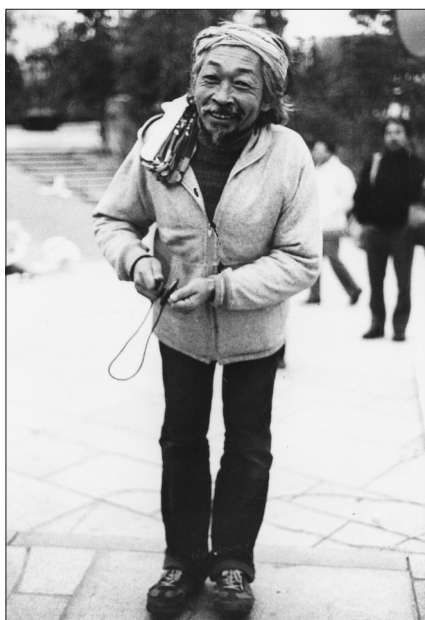
ポンちゃんの死で改めて今を大切に生きようって思ったよ、人生に悔いは残しちゃ駄目だね、それは死ぬ人が、残していく人達の為にできる精一杯の死に方かもしれない。

ポンちゃん、私はポンちゃんの愛するヒッピーに染まらなかったけど、ヒッピーであるポンちゃんが大好きだよ。

ポンちゃんの娘に生まれてきて幸せよ。

ポンちゃんの沢山の仲間達に感謝します！！こんなに暖かい人達に囲まれてポンちゃん幸せだね。

言葉ではなく気持ちでポンちゃんの歴史を感



じ、知ることが出来きたよ……いや、これからもまだまだ感じ、知ることができるんじゃないかな。

遠くから駆けつけてきてくれたみんな本当に心から感謝してます！ありがとう！

電話や手紙をくれたみんなありがとう！

メッセージをくれたみんなありがとう！

ポンちゃんありがとう！

顔も声もオーバーアクションも調子に乗りやすいところもそっくりなのに、肝心なところは似なかったな～

私が似れなかったところが、ポンちゃんが一番大好きなことだよ。

来世でも娘にしてね。

宇 摩

ぼんの最後の旅立ちに駆けつけてくださった皆さん！暖かいお別れのメッセージを寄せてくれたみんな。

本当に本当にありがとうございます。

24年前のこの日にチェルノブイリが爆発して……。12年前のこの日、一緒に反原発運動に熱くなった親友放出さんが亡くなった。ぼんちゃんはいかにもぼんちゃんらしく、この日を選んで旅立った。

ナゼ 今 ここにぼんが居ないのか……

余りにも急な別れだったので、まだ心がついていけません。

4月23日の金曜日、風邪が悪くなり入院。でも自力で歩き、私の車で病院へ。25日の日曜日、午後2時まで私と会話をしていたぼん。自分で姿勢をかえたり、マスクをはずしたり……。「いつもみたいに簡単に良くならないね……」と少々心配はしていたけど、まさかその一時間後に危篤状態になるとは夢にも思わなかった。

「何か欲しいものはある～？」「明日又来るからね」ってそのたびに「うんうん」と答えてく

れて、孫達とも会話して……。

それが最後になるなんて信じられないよ。1時間かけて帰宅。ぼん宅に着いた丁度その時に病院から電話があり「苦しんでいるのでモルヒネを打たせてください」って……すごく簡単そうに医者から言われた。「とても苦しんでいるので呼吸を楽にする為にその処置が必要」だと告げられ、私と妹が駆けつけた時には全く見たことも無いぼんの変り果てた姿がベッドに横たわっていた。

余りの変わり様に、さっきまで私と話をしていたぼんは？ 何がこの数時間に起きたの？って私も妹もパニック。ただ目をつむっているだけみたいに見えるから、声がかかるほど「ぼんちゃん！！ぼんちゃん！！」って叫んでいるのにちっとも目を開けてくれなかった。

「きっとご家族の声はご本人に届いているでしょうからお声をかけてあげてください」とかなんとか看護師さんに気休めを言われたけど、そんな言葉はむなしく聞こえた。だってぼんちゃんはさっきまで私としゃべっていたのに……

「ぼんちゃん早く起きて！」と一晩中、翌日26日月曜日の午後2時26分に息を引取るその瞬間まで、二人で声をかけていた。シヴァのマントラを歌ったり、大声で泣いたり叫んだりしても、ぼんはとうとうお別れも言わずにさっさと旅立ってしまった。

娘と孫全員に看取られて、涙の洪水に溺れる様に……でもぼんはひとり静かに眠るように逝ってしまいました。

約束の75歳までまだ2年もあるのに。6月には一緒に奄美に行こうねって約束していたのに……。

でも、思えば3年前に意識不明で入院した時、とてもひどい状態で、体の機能は終わりと思ったのが聴覚障害、視覚障害にまでなったのに復活！最後の3年は異常に元気！そして異常にハイスピードで活動をしていて「ぼんちゃんこれじゃあ80歳まで生きそうだね～」 「80歳まではどうか解らんけど75歳までは充分生きれそうだ」と本人も余裕だった。

そんなに甘くはなかったね。 幼児期に医者「18歳までは生きられない」って言われたのに、激動の人生をたっぷり73年生きたもんね。最後の3年間は大サービスだったのかなあ。好きなだけ行きたいところへ旅して、好きな女とくっついたり離れたり……。大好きなボンしまくって！！書きたいだけ好きなこと書いて……。 ぼんちゃんやりたい事いっぱいやったよね。 沢山の友人に見送られ、皆からのメッセージと沢山のハーブを手土産に……孫達の笑い声中 ぼんちゃんは幸せに旅立ったよね。

これからはそっちの仲間たちと好きなだけボンしまくって！おまつりやって、マントラ歌って！！

まだまだ一緒に居たかったなあ まだまだま

だまだ話したいこといっぱいあったのになあ。
ぼんちゃんに出会えて良かった。ぼんちゃん
の娘でよかったヨ。 いっぱい困らされた
けど、たっぷり面白い3年間を過ごさせても
らった。

来世でも娘にしてね。そしてまた子守唄に
マントラを歌って。寝物語にはラーマヤーナ
のおとぎ話と自作のしか太郎じいさんがいいな。
美味しいがんちゃん煙の中で維摩と転げまわ
って笑うから。あばっち本当にありがとう。
みんな 本当にほんとに有難う。

「不思議の国で またね!」と おまつりぼ
ん太は一足先に旅立ちました。

追伸 6月末に飛騨高山の聖なる山「位山」へ
ぼんの散骨へ行きます。来年は奄美大島へ、数
年後にはインドのガンジス河へも散骨しにいき
ます。まだまだぼんとの旅が続きます。

ボン・シャンカール!

ポンは車からおり・・

内田 ポブ

春風めぐるツアー終え

立川のセイカのところで宿をかり

ツアーも最後だった事もあり二人で少々飲み

翌朝まったりお茶を飲みおしゃべりをしてい
ると電話が入り

「ボンさん危篤」の知らせが入った。

夕方になってしまったのだが、ぼくらの到着
を待たずに逝ってしまった。

突然の事でどのように受け止めていいかわか
らずに葬儀に突入してしまった。

雷赤カラスで

諏訪之瀬で

宮崎で

東京で

奄美で

沖縄で

西表で

高山で

大鹿で

秩父で

そして羽生で

ボンとの日々が一瞬の中を通り過ぎて行く

ボンの死顔をながめていると、この死が終わり

ではないと言う事が思えてきた。
変わらないポンは永遠に歩いて行くんだ
なと言う気がした。

ポンは車からおり
一人歩き出した

それだけ

どうせ果てしない道だ

早くても、遅くても関係ない。

でも肉体をはなれたポンは早いかも

ポンは終わらない

終わるわけがない

終われるわけがない

道は白い光にあふれている

風もおだやかだ

鳥達が鳴きかわしている

ポンはあせた紺色のリュックを背負い

ぶらぶらと歩いている

道も果てしなく

景色も果てしなく

自己探求のトリップもなく

ポンは歩いている

否自己探求だけが歩いている

トリップはない

ポンはいない

狂気の巷行く

念仏行者のよう

あのずるそうな目

いかなるものにも

そまる事のない知恵

娘達の成長に

心を忘れる

人の手から手へ

心から心へ

一枚一枚

手渡す

マントラ

狂気の巷行く正気

正気の巷行く狂気

なにものにもそまる事のない

バクタよ

でも

ただ

あなただけには

Om namo shiva

ヒッピームーヴメント史

連載は未完のまま終了

ボンが亡くなったと聞き埼玉・羽生にある
自宅にかけつけてボンの遺品を見せてもらっ
た。旅で描きためた絵のスケッチブックや毎
日あったことを書いたメモ、原稿の予定を書
いたノートなどが置いてあった。その中には
この「ヒッピームーヴメント史」の連載が来
年の1月号で終わるところまで来ていたこと
も書いてあった。それも最後の1回は僕のリ
クエストで山尾三省論を番外として書いても
らう予定だったので、実質的には11月号、つ
まりあと3号で終わる予定だった。

いずれにせよ今となっては未完で終わるし
かない連載だが、前号の最後に出ていた無我
利道場の右翼襲撃事件の意味について、ボン
がどう思っていたかをボンの個人誌「ヒダマ
通信 号外 88.11.8号」から引用しよう。

「……ムガリのような平和で非暴力な若者集団
で、しかもヨソ者という弱い立場にある人間
に対して“過激派”のレッテルを貼り、莫大
な金を使ってヤクザを雇い、放火や殺人未遂
までの犯罪を行使させて、かくも執拗に追放
しようとしていることの真の目的は何なのか。
その実行担当者が徳之島人で占められている
ことからして、思想的対立とか、登校拒否と
か、枝手久開発程度の単純なものではありえ
ない。この事件の背後には“松魂塾”の幹部
たちすら知らないような、得体の知れないプ
ロジェクトがあるにちがいない」……として、
ポンはそれが核のゴミ捨て場（高レベル廃棄
物？）を作り“MATプラン”を実現させよう
としているわが国の原子力産業界であり、プ
ルトニウム帝国と呼ばれているものだ……と
書いている。核のゴミ捨て場は未だに決まっ
ていないし、また徳之島がつい先頃、普天間
の移転候補としてあげられたことを考えると、
ボンの読みはあながち見当違いだとは言いつ
れないのではないだろうか。ボンの批判精神
と勘の鋭さを受けつぎたいものだ。(あ)

ポンの本

- 『トワイライトフリークス』
2001年刊/ピレツジプレス
- 『マリファナX』 * 共同執筆
1995年/第三書館
- 『スクナ(上/下)』 * 漫画の原作
1991年/新潮社
- 『アイ・アム・ヒッピー』
1990年刊/第三書館
- 『奄美独立革命論』 * 共著
1980年刊/三一書房



自費出版もの

- ★ 『麻里花詩集』 2004年/¥500
桂川救援運動のため13篇の詩をまとめた。
- ★ 『詩集オー・レナガラ・バカフレムン』 1984年
反ヤマト、反日、反天皇の立場からの詩集。

ポンのホームページ

ボンの絵を絵葉書として販売している他、コラム“麻声民語”“古
き良きインドの大麻行”など毎月のように更新していた。今後の
情報・お知らせも下記サイトに載せますのでご覧ください。

<http://amanakuni.net/pon/>